

DOJIN

R18

成人向け

18歳未満の
購入：閲覧禁止

添牙いろは
イラスト・はにや

こころは
こづくり
実験室

その〈研究所〉に性欲は存在しない——ということになっている。

男は去勢を、女は避妊を。人類に資するための研究のために、繁殖行為は必要ない——それが、〈地下研究所〉の意思である。

しかし——

「ヤシロ様あ……」

「おちんぼ様あ……」

ここは、〈研究所〉の本棟ではない。輝かしい成果を挙げたとある教授のために、特例として建設が許されたものだ。

何故なら、彼の研究に誰も関心を示さない。

確かに、聞けば誰もが納得する。だが、自分には関係がない。

性欲を失った、〈研究員〉たちには。

ゆえに、彼に続く者はなく、

共に歩む者もない。

異端であり孤高——それが彼、研究員番号846——ヤシロ教授に対する評価だった。

誰も近寄らぬはずの個人所有のラボであるにもかかわらず、何やら今日の上の方が騒がしい。

「ふん、誰かがまた勝手に入り込んできたようだな」

以前にもそのようなことがあったし、ノック間隔による認証から別の方式に切り替えた方が良くもしいれない。このへ研究所には扉を乱打するような野蛮人はいないと思っていたが……いや、そう何人もいるものではないだろう。ならば……

「なあ、お前たち、お前らの室長と私……どちらにつく？」

その問いに、女たちは迷わない。

「おちんぼ様です！」

「チンチンに決まっています！」

「陰……おちんちんに尽くす……のっ！」

女からの返事にヤシロは満足そうに、そして、心底愉快そうにクク、と笑いをこぼす。

これならば、何の心配もない。コイツらは命に替えても我が身を護り通すことだろう。

だから、彼はそのまま迎え討つ。

下階深くにある寝室で、女たちを股の下に侍らせたまま。

ここは 子づくり 実験室

添牙いろは

目次

| | |
|------------------|-----|
| ここは子作り 実験室..... | 7 |
| 不倫、その末路の少し前..... | 175 |
| 女、満開 | 197 |

ここは子作り 実験室

研究によって目指す先は遠く険しく、未だその道半ばである。ゆえに、進むべき時間と立ち止まるべき時間は明確に。就寝一時間前は、 \wedge 研究員 \vee であることを忘れる、と決めている。

ヤシロが私室へと戻ると、ふたりの下着姿の女が待っていた。ひとりは桃色のショートカット。もうひとりは緑のロングヘア。ただ、その整った顔立ち、そしてプロポーションは双子のように瓜二つ——それは、ひとりのモデルをふたつに複写したかのようでもある。

「イツヤ、ナナ、今日も頼むぞ」

透けるようなネグリジェやレースのあしらわれたショーツなど、この \wedge 地下研究所 \vee では手に入らない。 \wedge 地上 \vee に対する多大な功績を築いた彼だからこそ、自由に取引することができる。

一方、男自身が着る服にこだわりはない。他の \wedge 研究員 \vee たちと同様に、ジャージに白衣である。部屋のベッドは、個人の部屋にしては明らかに広い。それは、この女たちを寝添わせるためだろう。

だが、そのためには、然るべき姿で。イツヤと呼ばれた緑髪の女が、恭しく教授の白衣を脱がしていく。その足元に、桃髪のナナは跪いた。そして腰元へと手を伸ばしていく。

しかし——

ゴツツツ!!

突然振り上げられた男の右膝が、女の鼻頭をグシャリと砕いた。七七号はそのまま仰向けに倒れるが、顔から流血は見られない。代わりに垂れ流される透き通った体液は、まるで鼻汁のようだ。

間近で繰り広げられる暴力に、五八号が動じることはない。白衣を壁のハンガーに掛けると——彼女もまた、ナナと同じように教授の前に膝を突く。これを、ヤシロはつまらなそうに見下ろしていた。何もなければ上半身を脱がしに掛かる流れになるはずだが……なるほど、前のタスクが未完了とみて、それを引き継いでいるらしい。

ゆえに、顔面へと膝を繰り出せば——まったく同じように吹き飛んでいく。こいつらに、そのような学習機能は備わっていない。憶えさせるには、別途コードを打ち込んでいく必要がある。だが、こんな気まぐれに対応させるのも面倒くさい。

教授は倒れているナナの足を無理矢理ひつつかむと、起き上がるうとしていた彼女は情けなくその上半身をひっくり返す。

「おやめください、教授——」

そうしないと、私のズボンを脱がすことができないからか。

私のズボンを脱がす、というタスクを消化できないからか。

まったく面倒なことである。

教授は自らズボンに手を入れ、熱^いり勃^た起^つ股間を剥き出しにした。が、それではタスク完了とは見なされないのだろう。ナナは未だにもたもたとバタついたままだ。もちろん、大人しくしている、と命じれば、これ以上醜態を晒すことはない。だが、今日は色々と試してみたい気分だ。

教授が足を離すとナナの踵は、重力のままに落下してゴトンと音を立てる。当然、痛がる素振りもない。女が起き上がるその前に、教授はその股を広げて入り込み、薄いショーツの股布を指で退^どけた。その内側は常に滴りが保たれている。ここは、そのためだけの器官なのだから。ゆえに、そこへと己を押し付けければ、それは導かれるように吸い込まれていく。

「ああああっ、おちんぼおおっ！」

セックス開始の台詞か。パターンはいくつか用意しているものの、型に嵌まっている感は否めない。そして、すべてのタスクはこれより一段優先度が劣る。

「ご主人様っ！ 私もおちんぼ欲しいですうっ！」

ズボンを下ろすことしか頭になかったイツヤは、そのタスクを放棄して、鼻を潰し

たまま自らの股間を弄り始めている。ナナと同じく、準備の必要などないほどに潤っているというのに。それでも彼女らは、そうするようにできている。創造主であるゴシユジンサマ教授のセックスを邪魔しないように。

「いいっ、いい……ご主人様のおちんぼ気持ちいいですうっ」

鼻をひしゃげさせたまま、女は主の股間を楽しんでいる。

楽しんでるように、振る舞っている。

それらはすべて、そのようにできているのだから。

想定外の枠を出ない動きに……ヤシロは苛立ちを募らせる！

「もっとおちんぼお……おち……ン……ッ!!」

声帯の構成も人間と同じ。ゆえに、喉を絞めれば騒ぎも止まる。とはいえ……血管までは再現していないし、酸素が必要なわけでもない。どうやら声を出せていない自覚すらないようで、快樂の表情のまましきりに口をパクつかせている。痛覚の類も備わっていないので、このまま首をへし折っても、そのまま下半身だけ反応するはずだ。とはいえ、骨格の修復には時間がかかる。何より……そろそろ頃合いだ。

ビュクッ!

「……、……ッ、……!」

おそらく、膣内射精時の台詞を叫ぼうとしているのだろう。頭を肩から引き千切らなばかりに締め潰しているというのに、女の顔は快感そのものだ。そもそも、苦しめながらのセックスなど想定していないし——この反応を見れば、その価値がないこともわかる。抵抗内容もすべてが予定調和では……いや、下手に反撃ルーチンを組み込むと、いざというとき厄介なことになりかねない。

ドクン、ドクン、と前立腺は脈打っている。それを搾精しぼり取ろうと膣圧も強くなってきた。射精に合わせて絶頂イクように設計しているはいえ……ヤシロという男は、本物の女を抱いたことがない。これが女の絶頂なのか——もしくは、男の理想によって積み上げられた虚像なのか。セクサロイドにリアリティなど不要……と割り切ってきたが、ある程度慣れてくると不満も否めない。

「……お前らはもう休め。損傷を癒やすため、カプセルに入ってな」

「はい、おやすみなさいませ、教授」

「今夜も美味しいおちんぼをありがとうございました」

深々と頭を下げるホムンクルスたちの方を、もう教授は見えていない。身体を蝕むのは、射精直後の脱力感。もうあのガラクタどもでは男に立ち戻ることもできなさそうだ。

どうすれば、この心を満たすことができるのか——それは、ヤシロにもわからない。

ただ、いまは、何も考えずに眠りたかった。きっと、夢の中だけは「研究員」であることを忘れていられるだろう。

やり甲斐もなく、決まりきった反応の中で射精するだけの日々——それに、ヤシロはすっかり飽きていた。

やはり、作り物の肉奴隷では限界がある。次の段階はやはり……生きた人間を肉奴隷化すること。その準備はできている。かなり効果を抑えたものを、「地上」の業者へ秘密裏に輸出してきた。実験と、それに、資金稼ぎも兼ねて。理屈上では、この延長線であるホムンクルスたちと同じように、性欲の奴隷にすることも可能はずだ。

一応、動物実験も行ってきた。が、複雑な知性を持った人間ともなれば同じようにはいかない。何より、メスに関する調査が著しく不足している。「地上」のホームレスを攫ってこようにも、路上で生活しているのは男ばかりだ。女を捕獲するのは、なかなか難しい。

なので、結局は実験体による実験となる。先日はただの思いつきだったが、今回は修繕のことまで配慮した上での——徹底的な殴打。完全に上半身の機能が停止するま

で続けてみたが、アレには思考を司る脳としての一極集中型の器官はない。ゆえに、独立して稼働する下半身が、最後までビクビクとのたうち回っていた。自分で造物しただけに、これもまた予想の範疇を出ない。

その結果、無駄に汗だけを掻いてしまった。怒りに任せて破壊し尽くしたにもかかわらず、この苛立ちが収まることはない。寝る前にシャワーを浴びながら……ヤシロは焦る。暗礁に乗り上げてしまった、自身の人生に。

人格のカスタマイズは必要になるが、一体でもあのホムンクルスの取引が成立すれば物凄い額になる。おそらく、死ぬまで研究費に困ることはない。だが、このままだとこぞの金持ちのためにセクサロイドを輸出するだけで生涯を終えるのか？ それでは決して、この心の奥深くに根付く失意を埋めることはできない。女が自分を必要としないのなら、自分を必要としている女を作り出してやる。その「復讐心」だけで研究に取り組んできたが——あの人造人間が自分の欲していたものとは思えない。

自分が目指していた未来さえ見失いかげ、男は熱い雨で不安を洗い流そうとしていた。が、冷めた心に温もりは戻らず——それどころか、不快感にさらなる拍車がかかる。

ゴトン、ドタン……

ヤシロ・ラボは地表に建てられてたものではない。入り口だけを表に残し、地下に向けて掘り進められている。ゆえに、上の方で何かが暴れているようだが……そこは玄関。そして、その要因はひとつしか思い当たるフシはない。ホムンクルスの暴走である。最近は落ち着いてきたというのに。そういえば、玄関口に破棄予定のものを一体放置していたか。その肉塊が、何らかの拍子に息を吹き返したのだろう。

自分のラボであつても全裸でうろつくのは落ち着かない。シャワールームから出ると、腰にタオルだけ巻いて……ヤシロは早足に上階へと向かつていく。

だが――

「ひえっ、ひえっ、ひええっ！ 私やアンタの主人じゃないし、陰茎だつてないつてばあ！」

その叫びは、若い女のものだ。が、こんな間の抜けた声を作った覚えはない。まさか、誰かが侵入している？ ……そんなバカな！

ここには表沙汰にしてはならない成果物が多数秘蔵されている。何者かに目撃され、それを他言されては自分の研究が瓦解しかねない。ともかく、状況を確認するため、教授は足を速める。そして、玄関ホールの扉を開くと――

女………だど………!!?

それも、自分の作ったホムンクルスではない。眼鏡を掛けた、白衣の女が人造人間に襲われ悪戦苦闘している。上下のジャージを見ると、明らかにここの〈研究者〉だ。何を考える前に、うちの不始末を止めなくてはならない。

「なっ、何をしている、四五号！」

破棄体の隣には、制御端末も合わせて置いていたはず。それは……ああ、そのまま壁際に残されている。ヤシロは急いでそれを拾い上げ、見苦しく暴れる出来損ないのうなじにむけて……一撃！ その信号が全身に伝われば、再びモノを言わぬ肉の塊へと戻っていく。

だが――

「ふ、ふひい……助かりましたあ……ありがとうございますう」

札を口にして立ち上がった女は……本当に、女である。この〈研究所〉に来てから、異性と言葉を交わしたことなど……学会のときくらいか。それ以前――〈地上〉での生活となれば、それはもういよいよ思い出せない。

とはいえ、ここは自分のラボであり、相手が不法侵入者である。

ゆえに、毅然と。

「ところで、キミは誰だ？　ここで何をしている？」

自分は何も悪くない――そう思い込んでの対応だったが、女に慌てふためかれて自

分の姿を思い出した。

「ひゃああっ、それはそのー……」

相手も妙齢である。いきなり全裸同然の男が現れれば動揺しないわけがない——と思ったが、どこか様子がおかしい。頬を赤らめることもなく、それは純粹に、自分の立場を誤魔化そうとしているようだ。

なので。

「もしかしてキミは……ああ、生物学の……」

ホームクルスで憤りを鎮めた直後で助かった。いまなら、不用意に興奮することもない。この女の顔は……学会で見覚えがある。筋肉やら骨格やらを専門に扱っており、その論文は人工体生成にも活用させてもらった。

「はい。研究員番号386……ミハル、とお呼び下さい」

なるほど、これが語呂合わせというやつか。ヤシロ自身も、846という番号から、非公式な場ではそのように呼ばれていることは知っている。実際に聞くのは初めてだが。

なので、それを自ら名乗るのは少し照れる。

「ふむ、ここまで来たキミに今さら名乗る必要もないかもしれないが……私は、研究員番号846……まあ、ヤシロで通っている」

さて。

この女は、女でありながら男の裸体に何ら関心を示さない。むしろ、服を着ているのと同じように異性と面と向かっている。きつと、ここで起きたことの重大性にはまったく気づいていない。ならば、丸め込みようがある。

必要以上にラボ内を嗅ぎ回られても困るので、一先ず外で会う約束だけ取り付けて、ヤシロはミハルを追い返した。まあ、問題はないだろう。自分が強姦に遭ってなお、平然と個人情報の名乗るような無警戒な女なのだから。

そもそもそれは、肉奴隷として開発されたものである。素っ裸でチンコマンコと大騒ぎする人造女を、それ以外の何に使う、というのか。生殖目的——などという戯言を真に受けるのは、純粹無垢な「研究員」くらいのものだろうか。それゆえに、助かった。とはいえ、だからこそその不安もある。恐怖に怯えてくれればまだしも、侵入者には『見てはならぬ物を見た』という自覚がない。何かの拍子に、罪の意識もなく漏らされては困る。だからこそ、確実に消しておかねばならない。

隙ならある。というか、隙だらけだ。自分が指定した「研究所内」のカフェに遅れて到着すると、女は平然と待っている。他に誰かを同席させている様子もない。本当にただの打ち合わせのつもりのようにだ。

席に着くと、雑談を交えながらミハルから来訪の理由を明かす。

「実はですねえ、教授の成果物である無性モルモットをいくらか譲っていただきたく……」

そういえば、論文にその件も載せていたか。別段本筋ではないのだが、この女の研究室には有用なものらしい。

これをダシにして、ヤシロは様々な可能性を探っていく。だが——目撃者を消す手段など、さほど多くはない。行きつく先は限られている。

この女——ミハルは、ややぼんやりしたところはあるが顔の造形はそこそこだ。その緩やかな表情は、大きく丸い眼鏡ともよく合っている。この研究室では、髪は伸ばし放題かこまめに切るか——コイツは後者のようで、肩にかかる頃に思い出してハサミを入れていられるらしい。貧相な肉付きも、グラマラスな人工脂肪を抱き続けた後なら、それもまた趣がある。

不可侵のはずのラボに紛れ込んだ異分子をどうやって始末するか——危険は伴うが、意思を持った肉奴隷の生体実験第一号とするしかない。ここまで会話の中で探ってきたが——その算段は杞憂に終わる。

いや、むしろ始まったのかもしれない。

危険を伴う実験を、安全に進めるべきときが。

「えー……まー……私が興味あるのは、へ地上へとゆーか、世界全般にですけどお

へ地上へに關心を持つへ研究員へがいるなどとは思わなかったが、彼女はそこに懂れている。

あのような、下らない世界を。

その一言によつて、ヤシロの頭の中での道筋がピタリと一本に繋がった。

ミハルに対して依頼したのは——へ地上へへ赴いての現地調査。とはいえ、彼女は研究室長——メンバーの責任を預かる身である。

だから、こそ。

「任せられるサブはいないのか？ それに……こちらでも最大限のバックアップは保証しよう」

これで、彼女の研究室に食い込む理由ができた。他に室長がいれば、配下の研究員が消息を絶てば責任をもってその所在を調べなくてはならない。だが、自分が事実上のその座に居座ることができれば——本丸を落とすも同然である。

にもかかわらず、ミハルは深々と頭を下げた。

「わかりましたあ……どうか、うちの研究員たちのことをよろしくお願いいたしますう」

その無警戒な様子に、ヤシロは笑みを噛み殺す。研究室丸々ひとつ使つての人体実験——心は踊るが後には引けない。それは、男としてだけでなく、研究者としても胸が高鳴る。テーブルに隠れたズボンの下で——抑えきれない興奮が、勝手に自己主張を始めていた。

ミハルの研究室がオスだらけだったら——実験は進んだとしても、男としての充足感を得られない。だが、幸いなことに残された人員は男が三名、女が三名——理想的なバランスといえる。いや、教授自身の本能的に考えれば、女の多い方が良かったが。そこは、研究者として自分を納得させることにする。

リーダーの座は掌握したとしても、サブリーダーは健在だ。先ずは、そいつから手を打っておく必要がある。この連中は男女を気にしなさすぎるので、あえて尋ねず——研究員番号796——ナクムとやらをラボに呼んだ。

基本的に、ヤシロが外に出ることはない。届け物を受け取るときは、分刻みで時刻を指定している。だから、今回も同様に。一八時ちょうどにヤシロは内側から扉を開けた。ちなみに、ここはへ地下研究所である。日の出も日の入りもなく、時刻はこ

のような待ち合わせ以上の意味を持たない。

さて、迎え出て……ヤシロは一先ずニヤリと口の端を歪める。

一先ず——女か。

ジャージの色は、ミニマムサイズを示す青。にもかかわらず少し大きな白衣を着ている。床を引きずるほどではないが、翻ればどこかに巻き込まれてしまうかもしれない。そういえば、最小形状の青ジャージすら袖や裾を追っている。どうやら、大人サイズに収まらない体軀らしい。

これで幼女ならヤシロとしても大歓迎なのだから……その肌質は三十代後半か。まあ、サブリーダーを務めるのだからそれなりの経験も積んでいるのだろう。

しかし、言葉遣いになってない。

「おう、教授！ オレの足では、ここは遠いぞ。次から、もっと近場で頼むぞ！」

……このへ研究所では才を一極集中で伸ばすあまり、言語能力に難のある者も少なくない。実際ナクムは、論文については代筆者に依頼している。この頭の悪そうな喋り方が、年下にリーダーの座を奪われた一因かもしれない、とヤシロは哀れみの目で見下ろしていた。実際は、ミハルがひとときわ優秀だった上、若年層が嫌がる管理職に好んで就いたためではあるのだが。そして何より、年功序列で考えれば最年長は他にいる。

が、部外者であるヤシロにとってはどうでもいいことか。

「悪いが、しばらくは付き合ってくれ。私はここを離れるわけにはいかなくてな」

ヤシロ・ラボは頻繁に出掛ける前提で設計されていない。何しろ、解錠が衝撃間隔によるものである。あんなことを頻繁に行っているのは、他の誰に見られるかもわからない。

「これも、研究室を預かるリーダーの仕事の一環……と納得して欲しい」

先日、ミハルもここまでやってきている。ならば、と渋々ながらも従ってくれれば良かったのだが……

「おおっ！」

ナクムの瞳が途端に輝く。

「オレも次のリーダーだぞ！ このくらい……どーってことないぞ！」

あまりの間抜けさ、ヤシロは逆に呆れてしまった。ここまで単純な女なら、畏に嵌めるなど造作も無い。



応援特区

こづこは

—略してKKO問題—

老若男女の隔てなく、
ただひたすらに成果主義——
それが、地下研究所における唯一の掟。
だが、研究員番号386——ミハルは
不毛な研究の毎日に嫌気が差していた。
そんな彼女に命じられたのは、
地上を蝕む少子化問題に関する実地調査！
ミハルが向かった先で虐げられていた
金のない (Kanemonai)
キモい (Kimoi)
オッサン (Ossan)
略してKKOを救うためにミハルが見出した
ただひとつの希望とは——

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/dystopia/>

露出少女と痴女の
モラルなき戦い!

裸族忍者シリーズ

いつでもどこでも脱ぎたがる
露出少女・埋竹礼菜
大好きな男と子供を成すことに
人生を懸けて迫ってくる痴女・鷹池。
そんな三人に翻弄され続ける
流され男子の痴情まみれの官能ライトノベル!



詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/>

Comicalize

忍者の愛した露出狂

私の彼氏は露出狂——
埋竹雛菊は恋人の悪癖に
嫌気が差しながらも、
そのとき垣間見せる男らしさに
どうしても惹かれてしまう。
本気の彼とぶつかるために、
彼女もまた、深夜の公園で
一肌脱いでみるも——

官能ライトノベル『忍者の愛した露出狂』が
ついに堂々のコミカライズ!

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/0001/>

いじめ
られっ子の
処方箋

正義の
投与の
行く末は

イジメの起きない
イジメ小説!?

イジメ撲滅運動——
とある高校で突如始まったこの騒動に
埋竹雛菊は意図せず巻き込まれていく。
しかし……

そもそも、イジメとは何なのか？
そんな疑問に突き当たる。
悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？
そして、運動を取り仕切る
学級委員・雨弓来未の真の目的とは……？
イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。

コミカライズ版 総集編第2巻
各配信サイト様より
好評配信中

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/presc/>



sorega kanojo no

それが彼女の

未知なる世界で
どう生き延びる...?

生存戦略!

seizon senryaku

オトナ向けな
番外編的短編集
『それが彼女の
性交戦略!』も
こっそり公開中!?

学校が異世界に飛ばされた!?
それでも見知らぬ大地の上で
誰もが遅く生き延びてゆく。
ある者は『力』で、
ある者は『智』で、
ある者は『心』で、
ある者は『愛』で。
そして.....
彼女たちは元の日常に
帰ることができるのだろうか.....!?

リユーカ編
コミカライズ版も公開中!

詳しくはWebで
<http://soekiba.net/4girls/>

アストラルツインズ

兄は国を襲い、女王は国を滅ぼす

アストラルツインズ

兄は指揮官に、妹は銃殺刑に

テロリスト 迫り来る反逆者
プリンセス 担がれる民間人
そして... アホの子 掻き乱す問題児!

からアストロ!?

妹はお風呂嫌いで
女王は珈琲が大好き


アストラルツインズ
後日談的R-18短編集!

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

コミカライズ計画も
全力始動中!

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/astra/>



遺伝子操作によって先天的な才を作り出す『ハイクラス』
薬学によって後天的に才を伸ばす『マイト』
ふたつの主義主張は、破壊と暴力を伴い鋸迫り合う。

『マイト』に所属しながらも
薬物を受け付けけない体質の少年・サカタは
『ハイクラス』でも『マイト』でもない
謎の少女と出逢い、そして――

315

—奪われた記憶—

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/lossmem/>

ゲーム会社でつくった
ゲーム

ただシナリオを追ってだけで
ゲームと呼べるのか？
ボタンを連打するだけでゲームなのか？
そもそも、ゲームとは一体何だったのかを
考えるための一作目です。

ゲームって ナンだ？

ゲームセンターで
つくったゲーム

ゲームで勝つことに必要なのは、
有利な戦略を選ぶことか、
有利なゲームを選ぶことか、
有利な相手を選ぶことか——
そもそも、ゲームに勝つとはどういうことかを
考えるための三作目です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/game/>

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

セイ イヤ アム ズ ラビット ト

うせぎせんとうらこつよ

ついに訪れた
家族の離散——
生きる道を失い
故郷である兎ヶ島へと
帰ってきた里倉和兔。
しかし、そこは——
老若男女問わず誰もが発情し、
異性を求める色情の地と化していた！
裸の女の子たちに迫られて、
最初は戸惑う和兔だったが、
次第に住民たちの勢いに
流されてゆく。
しかし——

食べて寝て

交尾する！

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/sar/>

僕と私の 露出日記

The diary of Sleeping under the stars for Ours

自然の中で育ち、
裸で野山を駆け回るのが
好きな少年。
非日常を求めて裸になり、
その快感に
目覚めてしまった少女。
孤独に背德的性欲を
膨らませてゆく二人だったが、
ついに――

立派に
育った
露出癖

わたしとあなたの
露出交換日記

スピンオフでも
野外で全裸！

野外で裸に
なりたい男と
他人の痴態を
覗きたい女。
出逢ってはならない三人が
出逢ってしまい――

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/outdoor/>

オンナ
たぎる♀に

おびえる♂
オトコ

乳を出そうが、尻を出そうが、
女の身体は贅肉扱い。
一方、成人向けコーナーには
半裸の男優ポルノがズラリ——
女が迫り、男があしらう、
そんな世界があったとしたら……？
価値観・身体づくり・社会システムに至るまで
真面目に考えてみた物語です。

リビド〜
男女の性衝動が反転した社会とは
リバ〜サル

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/rev/>

地下深くに隔離されたその研究所に携わる者は
例外なく去勢されている……はずだった。
しかし、密かに施術を逃れていたその男は
性の概念を忘れた女たちの性を目覚めさせ
快楽によつて支配していく。

欲望のままに己を買き通す天才科学者の
卑猥な人体実験の目指す先は……？

空色書房

Sleeping under the sky